



2013年(平成25年)
3月号(No. 814)

公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-room@jac.or.jp

2012年海外登山助成基金レポート

先月号に引き続き、当会海外登山助成基金を受けた登山について報告する。ひとつはGiri Giri Boysによるパタゴニアでのクライミング。3つの成果をあげて帰国した。ふたつめは、広島県山岳連盟によるネパール未踏峰。雪崩に遭い、引き返さざるを得なかった。以上で、2012年の助成6隊のレポートを終わる。

Report- パタゴニア縦走レポート

横山勝丘 増本亮

横山にとって二度目となった、今回のパタゴニア。昨年とは比べものにならないほど天候にも恵まれ、オーバークウチ前の充実した時間を過ごすことができた。

今年は縦走に焦点をあてたといえ、日本アルプスを歩くようなイメージとはほど遠い。大岩壁を

取り囲むように鋭い岩峰、岩稜が走り、それが山頂に向かって複雑に延びている。これをつないでいく……それがこの地での縦走だ。なにより組み合わせ次第で、さまざまな遊び方ができる点が魅力だ。頭に浮かんだ案はふたつ。ひとつ目はポローニ縦走。この山は、フィッツロイ北面に入った者なら誰もが目を見張るほどの印象的な針峰である。去年の遠征の際、何度この山の麓を歩いたおかげで、

目次

2012年海外登山助成基金レポート	1
山岳文化を大切に——第二十一代会長 平山善吉氏	5
九州脊梁登山地図を作製	6
第5回WCM(ウインタークライマーズ・ミーティング)上高地山岳研究所で開催される	8
追悼 史占春名誉会員を偲ぶ	10
東西南北	11
白山の地籍について	
新入会員	11
図書受入報告	11
活動報告	12
資料映像委員会/集会委員会	
支部だより	14
越後支部/福岡支部	
図書紹介	15
会務報告	17
ルーム日誌	18
会員異動	18
INFORMATION	19

▶日本山岳会事務局(含図書室)取扱時間
月・火・木……………10~20時
水・金……………13~20時
第2、第4土曜日……………閉室
第1、第3、第5土曜日……………10~18時



クアドラドのCOLからポローニ山群を眺める横山。横山の背後、左下から鋭鋒に向かって延びる稜線が下部の新ライン

ぼくの頭のなかに完全にインプットされてしまった。そしてもうひとつが、フィッツロイ縦走である。これはもう、説明の余地もない。衣料メーカーのパタゴニアロゴでご存知の方も多いだらう。7つあるピークを、北から南へ繋げて登る。

単純かつカッコいい。

ポローニ縦走トライ

最初の晴天周期は、クリスマス後に訪れた。フィッツロイ方面に向かうにはまだ季節が早すぎるため、標高の低いポローニを目指す。25日、未踏の下部岩壁に取り付く。最初の6ピッチは、想像以上の良質の花崗岩を楽しめた。そこを越えるると一転、複雑なりッジが始まる。ルートファインディングに苦勞し、何度も登り返しを強いられた。想像以上に長い下部岩壁は、13ピッチに及んだ。

中間部の雪稜をたどって上部壁の既成ルートに取り付こうとしたところ、下部の2ピッチは雪に覆われていた。そこで、事前に目をつけておいた右のラインから取り

付く。ここは未踏だったようだが、内容は「素晴らしい」の一言。どこまでも一直線に続くクラックは、ヨセミテにあっても三ツ星と言え、質の高さであった。上部の既成ラインに合流してからも、楽しいクライミングが続いた。

アグハ・ポローニの山頂に立つたのがちようど日暮れ。急いで裏側を下降する。計6ピッチで雪面に下り立ち、平坦地を探してビバークしたが、結局寝たのは午前3時を過ぎていた。

翌日はアグハ・ステファンからセロ・ポローニ東稜へと縦走。技術的にも難しい場所は少なくて比較的順調に進むことができたが、



ポローニ山頂にて。左横山、右増本。背後はフィッツロイ

既成ルートに合流してからの雪の処理と、傾斜の強い北面のトラバースに苦労した。そしてその頃には風が強まり、雪も降りはじめた。残念ながらよいビバーク地を見つけないことができず、北面に見つけた幅30^{センチ}ほどの外傾したレッジに腰掛けてビバークするよりほかなかった。

翌朝の朝から風雪。下降することだけにエネルギーを費やす。南面を眼下の水河に向かつて、一直線に下った。

アグハ・ポローニまでは新ルート、そこから先も未踏のリッジをトレースして既成ルートに合流した。でも、セロ・ポローニ東峰までは残り100^{メートル}、計画していたラインのトレースは失敗に終わった。もちろんそれは悔しいが、内容は非常に充実していた。それなりに満足はしている。

フィッツロイ縦走トライ (ケアベアトラバース第5登)

待ちに待った長期の晴天周期は1月中旬にやってきた。フィッツロイ山群最北端のギジャメのコルを目指し、コルでビバーク。翌日、雲ひとつない快晴のもと、快調に

ロープを延ばす。技術的には5・11を越える部分はなく、登ることそのものに苦労する部分はない。それよりも、リッジの縦走部分こそが難しい。技術的には最高でも5・10前半なのだが、右に左にリッジを縫うようにして進み、膨大な数の懸垂下降を強いられる。そしてまた、そういうタクティクス変更の判断を瞬時に行なう能力こそが必要である。

ギジャメとメルモスを越えて、フィッツロイの基部に着いたのは2日目の夕方だった。ここから標高差1200^{メートル}の北ピラーである。ここは技術的にもそれなりに高く、5・11が連続する。しかし、普段からフリークライミングに慣れてさえいれば、登るのに苦労することとはあまりない。それよりも、ロープを傷ませないで登るのに気を遣うことの方が大変だった。登攀3日目の夕方にはフィッツロイのヘッドウォールを登っていたが、

なんとか持ちこたえていた二本のロープの外皮がいに破れた。これ以上の登攀は続行不能である。とりあえず山頂を目指し、夜11時には着き、そこでビバークした。翌朝、傷んだロープに怯えなが

ら南東稜を下降。コルから先の登攀は望むべくもなく、氷河に向かって懸垂を続けた。チャルテンの町に戻ったのは午前3時半を過ぎていた。体力的な余裕はまだまだあったし、気力だって萎えてはいなかったはずだ。でも、ロープが傷んだのは不運だったのか？ いや、そうではない。結局そういう細かな部分に気を遣えるかどうか、の話なのだ。そしてまた、そういう自分たちを取り巻くことすべてに気を遣い、すべてうまくやりくりしてもなお、気力体力を失わずに登り続けること、それがこの縦走の核心だ。そういう意味では、まだまだぼくたちはこの縦走を完成させる実力が整っていないかと考えてよい。

きつと、この先の稜線をつなげて登っていったときに、想像もしないくらいに疲労が心身ともに訪れるに違いない。それはまた、楽しみでもある。

ポインセノット南西壁ジャッジメント・デイ第2登(フリー初登)

残された日程をムダに過ごすのもつたないので、フィッツロイ縦走における最大の核心となる

であろう、ポインセノットの下降ラインを偵察を兼ねて登りにいった。とは言え、南西壁でベストと言われるこのルートのフリー化を試みるということこそ、魅力を感じていた。

ルートは一部、もろいセクションはあるものの、それも許容範囲内。中間部のスッキリした岩壁部分は、どのピッチも非常に質が高かった。懸案のエイドセクションでは、フリー化するという興奮は相当のものだった。純粹にクライミングそのものを楽しむことができて、それまでの二つの縦走とは違った楽しみが味わえた。ビバークを挟んだ2日目の夕方、ぼくた



増本がヘッドウォールをリードするフィッツロイ

ちはポインセノットの山頂に立った。滞在50日間、充実したクライミングの連続だったけど、成功と呼べるものはひとつもなかった。そういう意味で、山頂でのひとときは贅沢かつ幸せな時間だった。山頂からの下降は、ここを登ってきたからこそ迷わずに下りることができたけれど、想像以上に複雑だった。ここに来ておいてよかったと心底思った。

すでに来年の再訪は決定している。ギアや生活用品も、現地に残置してきた。これから一年、やるべきことはたくさんある。やれることはやったとしても、成功できない可能性だって高い。でもそれだからこそ、挑戦する意味がある。集中して一年を過ごしたい。

【隊名】Giri Giri Boys Patagonia Expedition 2012
 【日程】2012年12月13日～2月1日
 【メンバー】横山勝丘、増本亮

Report ②

広島県山岳連盟
 ネパールの未踏峰アンプー1峰へ

名越 實

最初の計画では、同じクーンブの南西、アマダブラムのNare氷河

にあるSurra (Malamphutan) 6573mを目標にしていたのだが、申請直前に西面より登られていたことがわかり、急ぎよ同じ山容、ほとんど氷雪壁でアルパイン向きの6840m峰(アンブラブチャ峠とバルンツェの間にある未踏峰)を見つけた。ネパール文化観光省のホームページより「アンプー1峰」という名前前でオープンされており、カトマンズ在住のジャーナリスト、エリザベス・ホーリウ女史に未踏峰であることと今年の申請がないことを確認して、目標の山を変更した経緯がある。

BCへ向かうにはまず、チュクンから2時間ほどイムジャ川をアイランドピークBC方面に遡る。そして、南からのアンブラブツァ氷河からの流れと合流する地点で、巨大なイムジャ湖の下端でアンブラブチャ峠への道へと橋を渡る。直径300mほどの神秘的なエメラルドグリーン色のアンブラブチャ湖の1ヶ所先にBCはあり、芝草の生えた快適なところである。

毎日快晴で、日のあたつている14時頃まではテントの中にはいられないくらい暑いですが、すぐ南西にそびえる6202m峰の陰に入る



アンブラブチャ・ラから。陰の左下から直上し、北稜へ

と急激に冷え込んで、11月中旬には夜中はマイナス20度まで下がった。例年に比べるとこの秋の天候は安定しているが、気温はかなり低かったように思う。

BCを決めるために、アイランドピークのBC最上部まで行き北面よりイムジャ氷河を偵察するが、アイランドピーク側にBCを置くのは、ローツェシヤール氷河とイムジャ氷河を横断して取り付くことになるのでやめることにする。

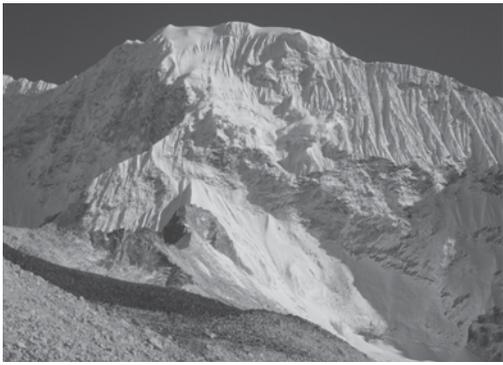
11月3日、高所順応のために登山隊員4名でアンブラブチャ・ラ(峠)で1泊する。

9日、調子のよい3名(名越、松島、品川)がゴー・アップ。アンプ

ラプチャ氷河のモレーンを1日かけて氷河末端に着きビバーク(A Cとする5400^{メートル})。

10日、不要な物をデポして、きれいなアイスを500^{メートル}ばかり登り、45〜60度のアイススカートに取り付く。3名でのスタカトクライミング。とことん軽量化した個人装備だけのザックを背負ったトップのスピードに、軽量化があまりできてなく共同グッズの入ったザックを背負った下の二人が追いつけず、時間が過ぎてゆく。

中間部のミックスまで120^{メートル}ロープで3ピッチとふんでいたが、スカートは思ったより長く(たぶん5ピッチ)、4ピッチ目を品川よ



西日の北稜。右下から取り付け雪稜でビバーク。上のハングレが崩壊

り代わった名越が雪稜に出た頃は薄暗くなっていた。ルンゼよりは2人を雪稜まで上げて、50度の雪水を切り、腰掛ビバークに入る。18時半、気温はマイナス30度C。

優雅な晚餐を終えシユラフに入つて眠りについた23時、さつきまっていたルンゼをドッドーと雪崩が走った。ええー、そんなあ。予想通り天気も安定し、気温も低く、キャラバン中どの山にも雪崩は見なかったのに……。われわれの頭上(ルートの中間部)には、唇状の巨大なハンギンググレイシャーが不気味に架かっておりずつと気になっていったが、何か嫌な予感があった。

今日は中間部のミックス下部までの予定だったが、かなり遅れ気味なので計算すると登り下り(A Cよりの下降も入れて)で、計4日、あのハンギンググレイシャーの下で作業することになる。僕は今まで自分が組織した遠征を8回行なっているが、死人はおろか一人のケガ人も出してない。もちろん数少ない幸運な側の人間に属するのだと思うのだが、自分の感性を信じることにする。

11日、たぶんあと3〜4日で終



われわれのルートとACを襲うブロック雪崩。氷河の底からサイドモレーンに上がった2時間後のことだった

村と合流して休息していた時、待っていたかのように突然轟音とともにあの唇状ハンギンググレイシャーの一部(どこかよく判らない)が崩れ落ち、われわれの登攀ルートとさつきまでいたACに襲いかかった。どこまでお前は運がいいんだと、震えながらただ神に感謝する。

15日、BCを出発し、18日にルクラ、キャシヤール隊の馬目さんたちと会う。19日には、カトマンズに到着した。

【隊名】広島県山岳連盟創立70周年記念登山隊

【日程】

10月20日 日本出発

10月31日 BC5100^{メートル}

11月3〜4日 高所順応アンプラプチャ峠5800^{メートル}

11月9日 BC発

11月10日 AC5400^{メートル}〜登攀開始

〜最高到達点5900^{メートル}

11月11日 撤退

11月12日 AC発、ブロック雪崩発生

BC着

11月15日 BC発

11月19日 カトマンズ着

11月26日 日本着

【メンバー】総隊長 京才昭
隊長 山田雅昭(留守本部)

メンバー 名越實(現地隊長・登攀リーダー)、松島宏(サブリーダー)、品川尊司、吉村光俊、平田恒雄(BCキーパー)、高所順応アドバイザー

連続講演会「語り継ぐ日本山岳会の歴史」第5回 山岳文化を大切に——第二十一代会長 平山善吉氏

資料映像委員会 羽田栄治

二十一代会長・平山善吉氏は、日本山岳会百周年の記念すべき節目の年に会長を務めた。その百年の歴史からみえたものは、山岳文化の重要性であるという。講演内容はDVDに収録したが、ここに概略を報告する。

山との出会い

小学校6年生の時、家族で富士山に登ったのが山との出会い。その後、近所の人と槍や穂高に登っていた。大学に入ったとき、友人に誘われて山岳部に。大学山岳部では、春は穂高、夏は剣でびっくりした。大学にはよい仲間がいて、毎日山に行つて授業を休んでも、誰かが代返してくれるというよき時代だった。山にばかり行つたので教授から、「お前は工学部建築科でなく、山岳部建築科だな」と言われた。

南極を意識する

昭和29年に富士山で遭難があった。そのとき、遭難対策本部を富士吉田の浅間坊に、現地本部は佐

藤小屋において救助活動をした。大学関係では日大、慶応、東大が活動にあたった。本部に報告に行くとき、さまざまな仕事をさせられたが、思えばそれが南極を意識するきっかけになった。

南極越冬中に、ヒマラヤや北極の本を読み、帰ったらどちらかに行こう、行きたいと思つた。最初の南極から帰国した年は、マナスル登頂の年だった。

日大山岳部で学んだこと

日大山岳部では、先輩の初見さんに山の文化(伝統、英国山岳会のことなど)を、金坂さんには登山の最新技術(雪崩、岩登りなど)を教えていただいた。それが日大山岳部の力になっていったと思う。日大山岳部は他の大学と違い、理工系の部員が多かった。特徴として登山道具の開発や、8000m級の登山を理論的にまとめた。その経験が、南極に行つたとき役に立った。日本山岳会会長になって

山岳会では責任、気風、バイオニア精神、山の文化を教えられた。



山岳文化の重要性について熱く語る平山善吉氏

その時の思いを会長としてやってみたいと考え推薦を受けた。当時、日本山岳会の平均年齢は63歳になっていた。精鋭な登山はできないが、年相応の登山はまだできると思い、さまざまな登山を奨励した。そして会長として強く感じたことは、山岳文化の重要性だ。アルパインクラブ(英国)の精神は、山に登るだけでなく山の文化を大切にすることでなく、その精神を日本山岳会は受け継いでいるはずだ。日本には、いろいろな山岳会が存在するが、他団体との違いは山岳文化を大切にし、残し伝えることにつぎると思う。百周年を振り返って

百周年事業として、いちばん力を入れたのは『百年史』の編纂。九十周年から準備を始め、出版できたことが心に残っている。式典には外国の客人を招いた。分水嶺踏査や、諸外国を含めた貴重な図書の展示も行なった。

亡くなった山本健一郎さんから、「百年はなにもやらないでいいからシュラギントワイトの絵を買え」と言われた。買うと何千万円もするうえ、世界中の古書店のどこにも探すことができなかった。そんな時、会員の松崎中正氏から、百周年の記念にと贈呈していただいた。改めて、日本山岳会とはすごいところだなと感心した。

日本山岳会のこれから

高齢化が進み、精鋭的な登山は困難だが、他にできることはたくさんある。そのひとつは、山岳文化を大切にするという仕事だ。貴重な資料の保管室も必要だろう。年寄りには知恵も力もあるので、この力を活用して登山文化を築くのが大事なことであろう。山仲間が集まり山の話をする場がなくなっている、これは残念だ。山が好きな人の集まる場所、そんな意識を大事にしてほしい。

トピックス

九州脊梁登山地図を作製

熊本支部 永谷誠一

はじめに

2011年11月3日、「九州中央山地・五家荘エリア(熊本県八代市)」が、全国で6番目、九州では初めて日本山岳遺産(山と溪谷社)の認定を受けた。そこで、全国の登山愛好者に九州の秘境であるこの地をPRし、安全に楽しんでいただこうと、九州脊梁登山地図を作製した。

九州の中央、熊本県と宮崎県にまたがる「九州中央山地国定公園」この山域にはこれまで登山情報を提供する図書は市販されていたが、広域登山地図の提供は初めての試みとなる。

また、山岳遺産認定を受けた九州脊梁「九州中央山地・五家荘エリア」に数年前から入り、登山道開拓を行なっていたこともあり、あわせてここに紹介したい。

九州脊梁とは

「九州中央山地・五家荘エリア」は、熊本県八代市・山都町・美里町・五木村・水上村、宮崎県五ヶ

瀬町・椎葉村に囲まれた広大な山域であり、そのなかに次の60山が点在する。

祇園山、揺岳、黒峰、トンギリ山、小川岳、黒岩、向坂山、白岩山、水呑の頭、木浦山、扇山、不動牙山、矢筈岳、遠見山、稲積山、切剥、天主山、三方山、高岳、国見岳、小国見岳、五勇山、烏帽子岳、目丸山、馬子岳、千間山、茂見山、洞ヶ岳、平家山、後平家山、夫婦山、南平家山、五家宮岳、ウードヤ山、京丈山、雁俣山、大金峰、小金峰、保口岳、普賢峰、茶白山、上福根山、岩宇土山、北山犬切、南山犬切、七遍巡り、石楠山、蕨野山、積岩山、鷹巢山、岩茸山、奥座向、高塚山、仰鳥帽子山、白鳥山、時雨岳、銚子笠、馬口岳、江代山、市房山。

全地域にブナ、ミズナラ、シオジ等の大木が繁り、ツクシシヤクナゲ、ミツバツツジ、キレンゲシヨウマなどが群生している。

また歴史的にも、平家落人の悲話で知られる椎葉の集落や、西南



九州脊梁のやまなみ

の役の薩摩退却のルートなど、往時を偲ばせる史跡も点在している。脊梁山地は九州の中央に位置し、東側に連なる山脈と、熊本県の緑川・宮崎県に流れる耳川をはさみ西側に並んで連なる山脈で、地元では前者を霧立越、後者を向霧立越と呼んでいる。両方とも古くからの宮崎(日向國椎葉と、熊本(肥後國馬見原)とを結ぶ駄賃付(それぞれの産物を馬の背に積んで交易物資を運ぶ通商路)のルートであった。

登山道をひらく

霧立越も向霧立越も、山都町からの入山路はほとんどなくなつて

いた。わずかに残された踏跡も、スズタケの繁茂により消えている。そのため、この山域に入るには宮崎県側か、あるいは、南部地域の八代市五家荘方面から迂回する方法しかない。それで、どうしても地元からの登山道の開拓が急務となった。

そこで平成9年秋、山仲間呼びかけ同志を募ったところ、10名が集まった。さっそく始動、1回目の作業にあたる。鬱蒼としたスズタケの中に突入、伐採にあたる。作業後、次回を約束し参加してくれたのは、多いときで5〜6名、少ないときは3名ほどであった。1日に1キロしか進めないような密生地もあり、思うようにはかどらず難儀した。

メンバーのほとんどは熊本在住者で、作業の往復に時間がかかる。ついにはテントを携行し、早朝から日没まで作業をする者も現われた。スズタケは細いが強いため、鎌や鋸、鉋までもすぐに切れ味が悪くなる。そこで砥石を携行し、作業にあたることもあった。

地元・緑川地区在住の森林関係従事の人たちは、私たちのつけた道筋を刈払機で通いやすくしてく



紅葉のきれいな白鳥山、御池(日本山岳遺産)

れた。協力者も徐々に増えてきた。そして作業から1年後の平成10年10月10日、入山路より標高差1000^{メートル}の小川岳(1542^{メートル})に至るルートが拓けた。関係者が一堂に会し、盛大に開通を祝う会を催し、お互いの労苦をねぎらった。そして、「さあ、次は全ルート開拓だ!」と氣勢をあげた。

その後、ルート開拓は順調に進んだ。そして苦難から8年後、ついに小川岳→向坂山→三方山→遠見山と、緑川源流域を囲む登山道が開通した。長い苦しい道のりであった。この日、作業にあたっていた7名は、それぞれ感無量の面持ちであった。

ルートを活かす

日本山岳会熊本支部では、この開拓したルートで脊梁山地登山を毎年実行、ほとんどの山域を歩いている。宮崎支部の皆さんも積極的に参加して、両支部の交流に深く関わっている。

またこのルートで、熊本支部の仲間の協力を得ながら、「九州脊梁トレイルラン35^{キロ}」を開催している。メジャーな登山道でもなく、知名度も低いルートだがPRを兼ねて呼びかけてきた。その結果、5回目となる今年は、300名の募集に申し込みが殺到。1日で定員オーバーとなってしまっただけの人気で、これには驚いた。ロケーションの素晴らしいに参加者の声が多まったようで、山都町のPRにも大いに役立っている。今後、さらに全国の愛好者に親しまれていくことだろう。

さらに、春夏の花や登山ばかりでなく、秋の紅葉、冬のスノーハイクなど、四季を通じて楽しめる魅力あるエリアだ。

地図の特徴と詳細

地図は、九州脊梁登山計画に活用していただきたいと念じ、ルー



樹氷の白岩山でスノーハイク

ト上の山々の位置関係を明確にしている。

国土地理院の数値地図2万5000図、および50^{メートル}標高図を使用。縮尺3万分の1にて印刷し、B1サイズ(728×1030^{ミリ})で北部版・南部版の2枚組とした。最新のGPSデータを基に、登山ルート・所要時間・注意箇所・登山口までの道路状況・道の駅・トイレ・温泉・作業ゲート・登山口の駐車スペース・避難小屋・経緯線・磁北線を記入し、わかりやすく楽しい地図になっている。

さらに高級ユポ紙を使用、耐久性にも考慮した。壁に貼って楽しめるのも嬉しい。

地図作製情報提供者(地図作製協力者・順不同・敬称略) 村田稔／熊本、林田正道／福岡、木野徹也／熊本、永谷誠一／熊本、小倉伸一／熊本、秋本治／宮崎、炭尚之／熊本。

皆さんもぜひ、この地図を片手に九州脊梁山地を訪ねていただきたい。

なお、九州脊梁登山地図に関する詳細は、「ECO九州ツアーリスト」HPを参照ください。

http://ecogsyu.com/tour/sekiyu_ouzoantanzu.html

Report

第5回WCM(ウィンタークライマーズ・ミーティング) 上高地山岳研究所で開催される

萩原浩司

2月9日から11日にかけて、日本山岳会上高地山岳研究所をベースにしてWCM(ウィンタークライマーズ・ミーティング)が開催された。ウィンタークライマーズ・ミーティングとは、アルパインクライミングを志向するクライマーたちが山に集い、ともに登り、登攀技術や山の情報を交換し合うとするイベントで、毎年2月に開催されている。

このイベントは、もともとBMC(イギリス山岳評議会)が主催するインターナショナル・ウィンター・クライミング・ミートからヒントを得ている。2007年、BMCの招きにより日本から馬目弘仁と横山勝丘が渡英。世界約20カ国から集まったクライマー同士でパーティを組み、スコットランドのベンネビス(1344m)を舞台にクライミングを楽しんだ。

ベンネビスは標高こそ高くはないが、雪と氷に閉ざされた岩場にはピトンやホルトなどの残置物

はほとんど見当たらず、各自の判断のもとにアイスクリューやカムを使ってプロテクションをとらなければならぬ。繊細な登攀技術と強い精神力が要求されるクライミングを他国のクライマーとともに経験したふたりは、帰国後の2008年2月、呼びかけ人となって明神岳の麓に19人のアルパインクライマーを集めて第0回WCM



明神岳南壁、南壁ルンゼを登るクライマー

を開催した。

翌年には第1回ミーティング(2009年)が同じ明神で開催され、2010年度は会場を米子不動に移して実施。2011年は栃木県山岳連盟の協力を得て足尾の松木沢で開催された。

この年、WCMの世話人たちに上高地山岳研究所の利用を強く勧めたのだが、2012年は暦の関係で2月の連休がなくなつたため、アプローチの楽な足尾でふたたび開催することに。そして再度の誘致の結果、はじめて上高地の山岳研究所がWCMのために使用されることになつたわけである。

*

2月9日深夜、沢渡の駐車場にWCMの参加者が続々と集まつた。東京、大阪、仙台、富山、静岡など、全国各地から駆けつけたクライマーたちが駐車場で一斉に入山の準備を始める。初日から登る時間を作るために、夜を徹して車で走り続けてきた人も多数いた。

午前3時ちようど、代表者がイベントの趣旨を説明すると同時に、山研での生活の注意点について説明をしていた。節水の心がけや携帯トイレの使用法などについ

ての確認である。その後、山研委員会副委員長の安井康夫さんと、管理人の内野かおりさんの協力で、参加メンバーたちを釜トンネル出口まで送り届けた。

釜トンネルで別れた参加者たちは、それぞれ自分のパートナーとともに各岩場へと向かつていった。この日は、霞沢岳に1パーティが入るほか、明神岳2263峰の東壁、南壁、西壁を登攀する予定となつている。全員を送り終えた私たちは、ヘッドランプの明かりのもと、メンバーたちの後を追うように山研をめざした。

今年の参加者は、過去最高の33人。それに対して山岳会側のスタッフは5人。これに信州大山岳部のアルバイト学生ふたりが加わつて、山研のベース運営に携わる。古野淳理事と佐藤守山研委員が前日から入所してくれたおかげで小屋開けもスムーズに進んだ。この時期の開所は初めてのことだけに、山研委員の方々には多大なるご協力をいただくことになつた。

今回、クライミングの対象となつた明神岳の岩場とは、河童橋から穂高方面を見て、右端にそびえる明神岳5峰のさらに右側、22



あえて難しいラインに挑戦するメンバー

63峰の岩壁群を指す。河童橋からほぼ正面に見える大きな壁が南壁。その左、S字ルンゼの左岸に立ち上がる壁が西壁。そして東壁は、明神橋から下流を見た際の右端に見える顕著な岩場である。それぞれのパーティは、残置物のないクリーンな壁（といっても岩質はもろく、ブッシュも多いのだが）に挑んでいった。数時間後、梓川の河原を廻りながらカメラの望遠レンズを岩壁に向けてみると、南壁の氷柱に取り付いているパーティや、顕著なリッジに取り付いているパーティがそこかしこに見受けられた。この岩場に、これほど多くのクライマーが一度に取り

付いたことはかつてなかったことだろう。

各メンバーが登攀中、山研は無線連絡のベースとして機能していた。各パーティから送られてくる現在位置情報をホワイトボードに書き込み、11班すべての行動がひと目でわかるようになっていた。無線の入りにくい東壁パーティのためには、信州大学の学生アルバイトがテント持参で林道途中にとどまり、中継連絡役となった。

この日は快晴。昼過ぎに再度、河童橋手前の河原から登攀中のパーティを撮影に行くと、南壁の基部に3人の人影が見えた。まもなく15時になろうとしている時間帯だったので、当然、下っているものと思っていたら、なんと登っている。あとで聞いてみたら、「条件がいいので、もう1本、登ってきた」とのことだった。

結局、彼らが下山したのは20時30分。他のパーティも夜の下山は当たり前、な感じで続々と下りてきて、最終パーティが戻ったのは22時を過ぎた時間であった。彼らの脅威的な食欲についても触れておきたい。とにかくよく食べる。まあ、マイナス20度ちかい



山研での夕食風景。彼らの底なしの胃袋には驚くばかり

厳寒の岩場で、朝の3時から動いているのだからカロリーの消費も並大抵なものではないのだろう。それにしても5台の炊飯器だけでは間に合わず、大鍋たっぷりのカレーをふた鍋、軽がると食べつくし、レトルトご飯をプラスしてようやく彼らの腹を満たすことができたようだった。

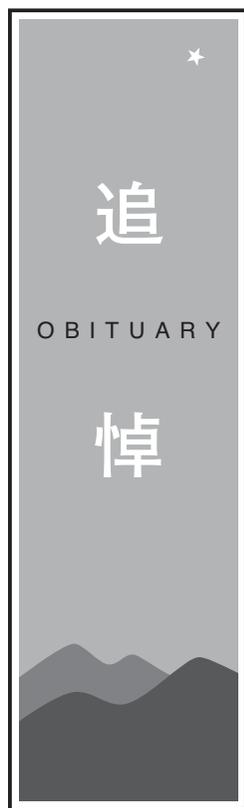
翌10日は、朝から小雪が舞う寒々しい空模様。そんななか、メンバー全員が岩場へと向かった。この日は初日同様、夜になって下りてくるメンバーも多かったが、22時を過ぎてもまだ稜線にいるパーティがいた。無線連絡では、「風雪で下降地点が分からず、疲労で

動けなくなった者がいるのでビバークする」とのことだった。この時点で、メンバーたちが動いた。

23時に4名ブラストラッセル要員3名の7名で構成した第一次救援隊を派遣。続いて午前2時と6時にそれぞれ救援隊を派遣し、自力下山させるためのフィックス作業を始める。

明るくなった8時すぎに、ようやく第1次救援隊がビバーク中のメンバーに合流した。3人のうち2人は自力下山できたが、1名に低体温症の兆候が見られたため、同日夕方、ヘリでピックアップされることになった(結局、大事には至らずに済んだ)。

相手の力量がつかめない者同士でのクライミングにはどうしてもリスクが伴うものだが、今回、救出のために動いたメンバーたちの行動は、まさに彼らが日本のトップレベルのクライマーであることが証明したともいえるだろう。事故対策という今後の課題を残しながらも、日本の若きクライマーたちに頼もしさを実感した3日間であった。

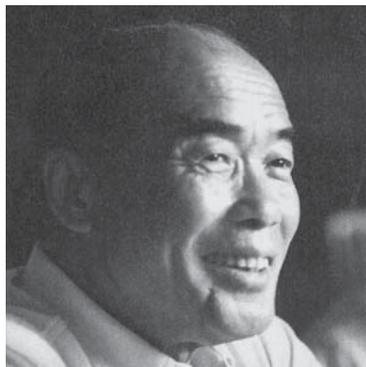


史占春名誉会員を偲ぶ

平林克敏

史占春さんは中国登山を通して日本登山界に尽くされた功績から昭和63年、名誉会員に推挙されました。

氏は、新中国登山事業の創始者として登山の最先端で活躍され国威の発揚に務めた共産党員として国内で高く評価されておりました。国の利益に資する登山事業を考え、中国登山協会を育ててこられた姿



史占春 (Shi Zhanchun)

1928年、遼寧省に生まれる。
1947年、中国共産党に入党。
1956年、中国・ソビエト合同ムスターグアタ登山隊長。
1957年、ミアア・コンガ(7,556m)登山隊長。
1958年、登山課課長、中国登山隊長に就任。
1960年、チョモランマ登山隊長並びに共産党書記を兼務。5月25日明け方、北面より登頂。
1975年、チョモランマ再挑戦登山隊長を務め、科学院と共に周辺の総合学術調査を実施。
1980年、日本山岳会チョモランマ北壁登山隊を支援。
1985年、初めての日中友好ナムナニ合同登山隊総隊長。
1988年、日・中・ネ 三国友好登山隊主席総隊長。中国隊総隊長。
2013年1月27日、逝去。享年85歳。
著書(編集責任)は「中国の高峰」「わが国内地の最高峰に登る」など多数。

に敬意を表するものです。
私とは初来日の昭和55年9月、長野県山岳センターで一行をお迎えし京都に同道したときからで、三十数年になります。同志社大学の迎賓館でグルラ・マンダータ(ナムナニ峰)登山についてお願いしました。要請は実りませんでした。翌56年の四姑娘山初登頂から交流が深まり、日本の登山界や西側諸国の事情について懇談の機会が増え、私たちの情報に大変興味を示し、中国登山の将来を常に考

えておられる姿が印象的でした。
両国間で初めて実現した日中友好ナムナニ峰合同登山(1985年)の過程で、氏の強い意思を知ることができました。1980年、JACのチョモランマ北壁登山は、中国にとって大変大きな刺激となりました。「あのように立派な隊員を中国としても育てたい。力を貸せ。ナムナニ登山はそのためにやりたい。登山のことはすべて任せる。若い隊員を育ててほしい」とまで言い切られました。この場に居合わせた齋藤惇生さん、吉田興和さんと私の3人も意を新たにしたらほどでした。
この頃、中国は南迦巴瓦登山(1984年)に失敗していたため、次世代を背負う若い隊員の育成を切望していました。この山は単独でやりたいと言い切り、中国隊のフィルムなど資料一式を手渡され日本に持ち帰り検討しました。
国賓として来日された胡耀邦総書記にナムナニ登山のことをお願いし快諾をいただいたのは、1982年11月28日、京都での知事主催の歓迎会の折でした。これも、史占春さんの提案によるものでした。その後、計画が佳境に入ると、

中国の国政から考え同志社と京大の合同隊では困る、日本の国の登山隊の形が取れないかとの氏の懸念に対し、私はその場で即答し、帰国後、櫻内義雄・橋本龍太郎両議員に日本代表として参画いただくことにより、中国側の意向に沿うことができました。この頃すでに、私達の話し合いのなかに日中ネ三国合同登山の構想が話題となっておりまして。
ナムナニ登頂成功祝賀会に史占春さんをはじめ新疆、チベットの幹部が中曽根総理に拝謁しました。その折に三国合同登山のことを総理に話したいとのことから、橋本龍太郎さんとともに別室で面談し、激励を受けました。その時の満面笑みに満ちた史占春さんの喜びようは、いまだ私の脳裏に鮮明であります。大規模登山を中国と共同で実施する基盤は、史占春さんの熱意によるものが大きかったと思っております。この意に対し、神崎忠男、岩坪五郎の両氏と私の3人が、山岳会関係者をはじめ、日本山岳会尾上会長、副会長ならびに会員の皆様の思いをお伝えしたく、葬儀に参列してきました。心よりご冥福をお祈りします。

N
 東 西 北
 南 南 北
 S

白山の地籍について

鈴木正規

白山の地籍および帰属について、歴史的な興味もあり調べてみた。

明治4年7月、廃藩置県により加賀には金沢、大聖寺、七尾の三県がおかれた。このうち大聖寺県は、同年11月に石川県と改称。七尾県は同年9月、石川県に合併された。

当時、白山(山頂および西南地域は平泉寺領)および山麓十八ヶ村(風嵐、牛首、島、下田原、深瀬、鴛ヶ谷、釜谷、五味島、二口、女原、新保、丸山、杖、小原、瀬戸、荒谷、尾添、須納屋)は、江戸末期まで、どこの藩にも属さない天領(明歴元年、白山のこと)について、牛首と尾添の争いが、加賀藩と越前藩の対立となり、結局、幕府が裁決、白山麓十八ヶ村を加賀越前

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします)

の西藩からとりあげ、幕府領としたものであり、飛騨那代の支配下で越前本保役所付となっていた。

ところが明治維新により、神仏分離の嵐がおきた。廃仏毀釈運動により、各地の寺院や仏具の破壊が行なわれた。白山山頂付近を管理していた平泉寺は没落し、江戸幕府は倒れた。それで一時、福井藩が管理していた。その後、明治3年12月に本保県がおかれ、越前の旧天領とともに、白山および山麓十八ヶ村を治めていたが、明治の廃藩置県で福井県となり、その管理が移った。翌、明治4年12月、その福井県が足羽県と改称、これによって白山および山麓十八ヶ村は足羽県の管轄になった。

ところが、天領時代からの公式名称は「白山麓十八ヶ村」であったため、地籍を「越前国大野郡」とするか、「加賀国能美県」にするかで、その判断に苦慮した。そこで、政

府に地籍について伺いをたてた。

政府は、足羽県と石川県(県名が石川県となったばかり)の上申書を検討した結果、「明治5年11月17日付けをもって、白山および白山麓十八ヶ村は石川県能美郡に属しめる」と、大政官が指令を出した。

この指令により、白山および白山麓十八ヶ村は現在の石川県に属すこととなり、現在に至る。

『白山調査記』に「今回石川県ニ於テ能美郡地誌編輯ノタメ本年夏始テ実地測量ヲナシタリ」とある。これは、大政官からの指令によって、白山および白山麓十八ヶ村が正式に石川県能美郡の管轄になったので、石川県として新しい能美郡誌を編輯する際、その所管である白山をも、初めて実地測量したものと思われる。測量は、おそらく明治6(1875)年2月以降、あまり年月を経過しない時期であったと思われる。



図書受入報告(2013年2月)

編著者	書名	ページ/サイズ	発行元	刊行年	寄贈/購入別
倉知敬	西藏民族国家崩壊に至る抗争の歴史: 米国図書紹介と論考	46p/26cm	横断山脈研究会	2013	発行者寄贈
富樫信樹(編)	ブータン チョモラリトレッキング 2012 報告書	44p/30cm	日本山岳会埼玉支部	2012	発行者寄贈
芳賀淳子	アルパタ山山のピッケルものがたり	35p/27cm	芳賀淳子(私家版)	2013	著者寄贈
酒井國光(編著)	茨城の山事典: 日本山岳会茨城支部創立5周年記念	296p/26cm	[筑波の山事典] 刊行プロジェクト	2013	発行者寄贈
高桑信一	山の仕事、山の暮らし / ヤマケイ文庫	382p/15cm	山と溪谷社	2013	出版社寄贈

活動報告

日本山岳会の各委員会、同好会の活動報告です

資料映像委員会

第16回全国山岳博物館等連絡会議を開催

1月19日、日本山岳会集會室にて、第16回全国山岳博物館等連絡会議を開催。参加者は11館の学芸員13名と資料映像委員9名の22名。各館の研究成果や企画展の内容が発表され、活発な質疑応答が交わされた。資料映像委員会からは、「二人(ウエストンと鳥水)の歩んだ時代の様相」を報告した。会議の前に、足立源一郎画伯のご子息で、元河口湖美術館館長の足立朗氏が昨年亡くなられた悲報が知らされた。

参加11館からの、自館の紹介を報告する。

〈谷川岳山岳資料館〉谷川岳登山口に所在し、山の状況や花、動物等季節ごとに見所を案内している。〈田淵行男記念館〉偉大な山岳写

真家で昆虫生態学者であった田淵行男の業績を後世に伝えると同時に、山岳写真、自然写真の分野の発展に努めている。

〈植村冒險館〉東京都板橋区が、冒険家植村直己の業績を永く後世に伝えるために設立した。展示室は年4回展示替えをしている。

〈四季の杜おしの公園写真・絵手紙美術館〉生涯を富士山の撮影に捧げた岡田紅陽がのこした作品と、カメラ等の資料を展示している。

〈松本市山と自然博物館〉北アルプスの3000^mを抱く岳都松本に織りなす美しい四季、自然と人との関わりを学び、黎明期に活躍した岳人の足跡を伝えている。

〈市立大町山岳博物館〉「北アルプスと人」をテーマにした常設展示が、平成26年春にリニューアルする。

〈富山県「立山博物館」立山の昔、今そして未来を考える博物館。



各館をアピールした第16回全国山岳博物館等連絡会議

〈立山カルデラ砂防博物館〉北アルプス立山地域の自然と歴史・砂防について、最新の研究成果を含めて詳しく紹介している。

〈東京都写真美術館〉写真と映像の総合的専門美術館として、1995年に恵比寿ガーデンプレイス内にオープンした美術館。

〈北区飛鳥山博物館〉東京都で一番低い山である飛鳥山に所在する博物館。十二、三万年以降の自然と歴史を展示している。

〈伯耆の国山岳美術館〉山陰の名峰大山の西側裾野に位置し、自然豊かな山間の中に佇む私設美術館。山行の折りにでも訪れてみてほ

しい。新たな発見があるかもしれない。
(溝口洋三)

集會委員会

ニュージールランド——ザザンアルプスの山旅

「ニュージールランド——ザザンアルプスの山旅」に参加した。1月21日、成田空港に集合したのは、AG社(アドベンチャーガイドズ社)の田中ガイドを含め10人、ほとんどが初めて会った方々ばかり。うまく仲間に入れるか、心配だった。22日、クライストチャーチ着。登山靴底と、食物の厳しいチェックをうけて入国。現地ガイドの案内で、300^m先のマウントクック村へ向かう。信号機なし、中央分離帯なしの道を時速100^{km}とどばす。途中、エメラルドブルーの湖に映えるマウント・クックの雄姿に感動。16時30分、村に着く。

23日、現地の山岳ガイド4人(日本語が堪能な女性ガイド・ジェーンと男性ガイド3人)と装備のチェック。ヘリコプターで山小屋へ向かう予定であったが、あいにくの天候でニュージールランド山岳会の



マウント・セフトン(スケッチ=秋山典彦)

山小屋で待機。タスマン氷河は雲の中で晴れる気配もなく、つらい一日となった。山小屋には、10人が一つの部屋で寝泊まりする。互いに自己紹介し合い、仲間意識ができた。

24日、天気が回復。朝食後、空港へ。3組に分かれ、ヘリコプターでタスマン氷河の標高2000m付近近まで移動。11時頃、ホックステッタードーム頂上(2822m)を目指して登山開始。氷河上には、上からは見えないクレバスがある。ヘルメットをかぶり、アイゼンをつけ、ピッケルとストックを持ってザイルで結び合せて登った。気温の低いときは、雪も硬く

アイゼンはよくきいていた。登りでは、全員のペースは快調。頂上付近の少しきつい登りも苦勞なく、3時間30分で全員が登頂した。緩い稜線でどこが頂上かはつきりしない。霧が立ちこめ、何も見えずに残念。早々に下りた。

帰路、ガイドの案内で、深さ10m近いクレバスの底まで下りてみた。淡いブルーの氷河の割れ目は、奈落の底を思わせる感じであった。クレバス降下後、気温が上がリ、雪はザラメ状となって足が重い。ザイルのツツパリと緩みが断続的となり、足並みは乱れ歩行が遅れる。19時、ケルマンハットに到着。全員、疲勞困憊であった。この日は、朝から12時間ちかくも動き続けた。さすがに小屋では、夕食後、死んだように眠った。

25日朝食後、ヘリコプターで空港へ戻り、ヒラリーゆかりのミュージラー・ハットまで登り、1泊。マウント・クックの雄姿を心ゆくまで楽しんだ。夕日の赤紫の空に映える山の色は刻々と変化した。

夜の星は降るようだった。朝焼けに輝くマウント・クックの雪稜は、ピンクから黄金の輝きに変化した。



マウント・クック(スケッチ=秋山典彦)

26日、マウント・オリビエ登頂後、花を見ながらゆっくり下山。これで山登りはすべて終わり、お世話になったガイドとビールで乾杯。冷えたビールは最高だった。

27日、フッカー・バレーのトレッキング。28日、クイーンズタウンへ移動。29日、湖のクルーズの後、馬に乗って広い牧草地のトレッキングを楽しんだ。牧草地は街から車で20分の場所にある。牛や馬、羊が散在し、小川が流れ、まわりは山が囲む西部劇の世界のようだ。5分間の説明ですぐ乗馬。一列縦隊で90分、馬の背に乗って景色を見ながらゆっくり歩いた。古い映画、「シエーン」の気分を味わった。

30日、オークランドへ移動。31日、成田空港到着。楽しい山行だった。

(秋山典彦)

支部



全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとレポートします。

越後支部

『越後山岳』第12号を刊行

越後支部は昨年12月、機関誌『越後山岳』第12号を刊行した。A4判、359ページに会員31人の寄稿と写真、地図などを掲載。山崎幸和支部長は発刊の辞で、「越後・佐渡・会津の山域に刻んだ会員の熱情を自由な紀行や研究に集めて、全国の岳人に発表する方針を、昭和23年の創刊号から頑固に継承している」と述べた。内容を紹介する。

〈あの頃(昭和20～30年代)の越後の山〉岩・沢の登攀、山スキー、山小屋、二王子岳今昔など7編、往時の面影がよみがえる。
 〈研究〉「妙高山の山岳信仰」、「平家落人はいたのか」、「飯豊山山名由来私考」、「高倉宮以仁王伝説の会津と越後の山々」、「北越雪道」の独語版と英語版の研究」、「新

編会津風土記』山岳考」、「妙高山を愛した人々」、「笹ヶ峰そして岡田長助」、「大日岳親子新道の資料」、「桂月の佐渡紀行」、「深田久弥、湯沢の一年」、の12編。それぞれ得意の分野での考証、とても興味深い内容だ。

〈紀行・記録〉五頭菱ヶ岳、金山沢、飯豊連峰、思い出の越年山行、以東岳、守門岳、谷川岳一ノ倉沢、山の絵日記、丸山岳の沢、毛猛山塊、風の神・関峰の11編。執筆者の個性があふれ、まばゆい。

〈論考〉「登山の今と先を考える」、「ライチヨウ会議新潟大会に出席して」、「越後の山旅」改訂計画私案」の3編。どれも意欲作。

〈随想〉岳人ならではの情感あふれる佳品6編。他に、望月力、横山征平両会員の追悼と編集後記を添えた。

わが古里、越後・佐渡・会津の山々の自然や民俗、伝承などをこ



『越後山岳』第12号 A4判 359頁

よなく愛する会員が、精力的に歩いて見て調べて綴った本書。まさに、60余年の伝統を貫く地域登山の金字塔ともいえるだろう。

なお、『越後山岳』第12号は、好評につき完売しました。

(筑木 力)

福岡支部

『新年岳人のつどい——映画「マナスルに立つ」を鑑賞

2月3日14時から、恒例の新年「岳人のつどい」を、福岡県太宰府市の太宰府館・まほろばホールで開催。会員外も含め、約90名が参加した。当日は、九州登山情報センター(山の図書館)に後援、福岡県山岳連盟と福岡県勤労者山岳連盟に協賛をいただき、幅広い岳人たちの集まりとなった。この日の目玉は何といっても、日本山岳会資料映像委員会所蔵の記録映画『マナスルに立つ』の上映会だ。

この映画は、1956年5月、日本山岳会登山隊が、世界第8位の高峰マナスル(8163m)の初登頂に成功したときの貴重な記録映像だ。監督・山本嘉次郎、ナレーション・森繁久彌、カラー98分の作品である。わが国による初の8000m峰登頂が、敗戦から立ち直りつつあった国民に感動と自信を与え、日本に登山ブームをもたらしたといわれている。

開会にあたって、中馬重人福岡支部長が、日本山岳会の歴史や現状、ヒマラヤ登山の歴史について触れ、あいさつした。その後の司会進行と映画解説は、支部事務局の渡部秀樹が行なった。

映画は、マナスルの登山計画から偵察隊の派遣とルート選定、第一次・第二次登山隊の挑戦と撤退を経て、第三次隊(横有恒隊長)の初登頂に成功するまでの道のりを淡々と描く。その迫力と感動がひしひしと伝わってくる。とくに、麓のサマ村で住民の強い反対行動にあいながらも、粘り強い交渉で乗り切る場面は印象的であった。上映後、会場からは自然に拍手がわき起こった。

上映終了後、同じ会場で懇親会



開会にあたりあいさつする中馬董人支部長

（岳人のつどい新年会）を開催、50名が参加した。中馬支部長のあいさつ、高木荘輔副支部長の乾杯の音頭で宴に入った。おいしい酒と料理をつまみながら、新春を祝い、楽しい山の話に花を咲かせた。会場では、この「つどい」に後援と協賛をいただいた各位より、それぞれごあいさつをいただいた。さらに、大矢統士氏撮影・制作のDVD作品「ヒマラヤ巡礼」（44分）を鑑賞。ヒマラヤの美しい峰々の姿形も十分に堪能できた。

最後に、深田泰三支部顧問のあいさつをもって、19時ころ盛会のうちに終了した。

（高木荘輔）



図書紹介

山岡光治・著

『地図をつくった男たち』 明治の地図の物語



2012年12月
原書房刊 263頁
四六判 2520円
定価

彩色が美しい山岳集成図。見て楽しく、観賞にも耐えられる美術的な要素もある地図である。それが剣岳測量100周年を記念して作成された3万分の1山岳集成図「剣・立山」からこのかた、発行されていらないのは寂しい限りである。私たちが日ごろ山歩きに携行している2万5000分の1地形図も見ていて楽しくないわけではなく、そこに見えるのは等高線と地図記号、地名といった情報だけで、いまひとつ想像力を掻き立てる楽しさに欠けるきらいがある。

それが最近では、電子国土という電子データでの提供が主になり、ますます無味乾燥な「情報」にシフトしていきそうな勢いである。その一環で地形図から送電線が消え、私たちは苦労をしている。

じつは今から100年以上前、全国の本格的な測量が始まる前に、美しい彩色の見て楽しい地図があった。「五千分一東京図」、「二万分之一迅速測図」といったフランス式の「地図彩色」図式で作られた地図である。日本地図センターで発行されている復刻版を見るとその明るい色彩と楽しさは旅心をかき立ててやまない。

本書のキーワードである「かきたてるもの」。それはこれらフランス式の地図が持っていた使う人、見る人に「美しい」「楽しい」と思わせる要素のことである。著者はそれを「旅に出たくなる」「風景が見えてくる」(壁にかけておき

たい)「所蔵したい」などといったことを感じさせる、その根源となるものが地図のどこかに含まれている」という言葉で説明する。

本書が主に取り扱っている時代は明治初期。その当時は国家体制が固まっていなかったため、測量事業を管轄する官庁についてもめまぐるしいほどの組織の改編が行なわれた。そのなかで初期には主としてフランス式を採用した地図製作が行なわれていたが、明治6年にドイツを範とする軍政への転換が図られるとともに「かきたてるもの」の少ないドイツ式が採用されることになる。その結果全国的に整備されたものが陸地測量部の五万分の一地形図である。このため、現在の日本の官製地図は、「かきたてるもの」という意味では、十分なものになっていないのである。

近年はさらに効率化、簡便化、電子化によって、地図における「かきたてるもの」は風前の灯となっている。地図(地図情報)の未来に一抹の不安を感じざるを得ないゆえんである。

本書は、国土地理院の技術者だった著者が、伊能図から明治維新

前後、そして陸軍参謀本部陸地測量部で本格的な地図測量が行なわれるまでの地図作成と人間群像、それにまつわるエピソードをわかりやすく書いたものである。読んでいくと私たちが日常的に利用している地図には「時代や社会の制約を受けながらも、多くの先人が努力を重ねてきた歴史と成果」が堆積していることがよくわかる。

また、本書のなかには三角点愛好家の間で話題になった外国人遊歩規程の測点標石、内務省地理局測点、凡号水準点など。さらには一等三角点設置のため日本の多くの高山を跋涉した館潔彦、剣岳登頂と柴崎芳太郎、ウエストンと測量師など、私たち登山者の興味をひく話題も多い。

考えさせられることの多い本書だが、読んで楽しい本でもある。

(近藤雅幸)



角幡唯介・著
『アグルーカの行方——129人全員死に、フランクリン隊が見た北極』



2012年9月
集英社刊 408頁
四六判 定価 1890円

『空白の五マイル』、『雪男は向こうからやってきた』に続く、角幡唯介の冒険ドキュメンタリー3作目。なかでも一番の出来ではないか。

19世紀、129人が行方を絶つた英国のフランクリン探検隊については、極地探検史上の大きな謎らしい。ヨーロッパとアジアを結ぶ北西航路を発見するために旅立つたフランクリン隊は、目的を達することなく全滅したとされている。しかし現地には、「アグルーカ」と呼ばれる隊の生き残りが北米大陸の不毛地帯にいたという逸話が残っているという。本書は、フランクリン隊の足跡や、アグルーカの面影を探しながら北極圏を旅した1600^キ徒歩行の記録だ。探検史のなかに自分の探検のテーマを見出す手法は、ツアンポーを探検を描いた『空白の五マイル』と

同じだが、本書は書き方というか、構成がまったく異なる。『空白の五マイル』では、探検史をひも解くことを重視してか、そもそも探検史に興味のない、私のような軽薄な読者には退屈な部分も多かった。しかし本書は、あくまでも角幡の行動記録を主軸に構成されており、フランクリン隊の足跡を追体験する角幡の行動を、さらに追体験できるおもしろさがある。極地における生活技術、極地探検とGPSや通信手段についての考察、飢餓、疲労、熊や気象のリスクなどが、角幡の行動や考えの一つひとつが切実でありながら、彼独特のユーモアをおりまぜて書かれていて、そこにグイグイと引き込まれた。逆に、前著以上に角幡の存在を強く意識させる書き方でもあった。また、北西航路をめぐる探検史やフランクリン隊に関する新事実を期待すると、もしかしたら肩透かしを食うかもしれない。

電子機器の使用は最小限、知恵と体力を頼みに自然の中に身をおくことを目指し、非常にロジカルで冷静な記述で体験を追体験させる筆力を持ちながら、文明や日常生活の平凡な幸せを求め、麝香牛(じやくかうし)の生

肉にがつつき体調を崩してみせる、等身大の冒険家。そんな彼の真骨頂のような一冊だ。

(阪辻秀生)

会報『山』への寄稿および投稿のお願い

会報『山』では、以下の原稿を募集しています。

- ・東西南北(意見、研究、エッセイなど) ・支部日より(各支部の活動報告)
- ・活動報告(各委員会・同好会の活動報告) ・俳句、短歌など
- ・山に関するイラスト(山や花など。紙面のあきスペースに使用します)

*原稿はいずれも1点につき1000字程度。採否および編集内容につきまして、編集委員に一任させていただきます。原稿は毎月20日を締め切りとし、翌月号以降の掲載を検討します。

とくにINFORMATION掲載については、締め切り(掲載希望月の前月20日)を厳守ください。*できるだけメールでのご連絡、ご送稿をお願いします。

【送付先・問合せ】☒ jac-kaiho@jac.or.jp

〒102-0081 東京都千代田区四番町5-4

日本山岳会 会報編集委員会

会員の皆様からの原稿をお待ちしております。

会報『山』編集委員会



**平成24年度第10回(2月度)理事会
議事録**

日時 平成25年2月13日(水)19時～
21時

場所 日本山岳会集會室

【出席者】尾上会長、吉永・西村副

会長、高原・森・小林各常

務理事、野澤・中山・永田・

萩原・節田・古野・川瀬各

理事、平井監事

【欠席者】浜崎監事

【オブザーバー】柏会報編集人

【審議事項】

1・平成24年度(後期)海外登山基金審査委員会答申について(萩原)

2月8日に委員会を開催し、「

クスムカンゲル南東壁登山隊」

(東海支部東海学生連盟)に30万円

の助成をする決定をした。(承認)

2・国際交流富士登山プロジェクト企画(海外委員会)(川瀬)

環太平洋地域の国々に呼びかけ

John Harlin氏(元AAAJ編集

報告

て5月に富士登山を行ない、海外委員会がアテンドする。10名を募集する予定(資料あり)。(承認)

3・6名の入会申込みがあった。(承認)

【協議事項】

1・平成25年度事業計画書案について(高原)

別添資料の通り、体裁は内閣府

に提出するフォーマットとした。

本計画書案に記されている概要に

加え、従来と同様の具体例を掲載

する。

2・平成25年度予算書骨子案について(小林)

別添資料により協議し、修正す

ることなく認められた。

【報告事項】

1・米国出版社よりのJANの電子出版事業について(高原)

John Harlin氏(元AAAJ編集

長)よりあったJANの電子出版の話は、執筆者の了解を条件に無償配付を許諾することとした。

2・日本三百名山ガイドブック出版について(収益事業・会員サービス検討PT)(節田)

支部事務局担当者会議で各支部に説明し、現在、担当する山の支部間調整をやっている。

3・松本市・松本市美術館よりの共催提案について(吉永)

松本市美術館の開館15周年記念行事として、実施は、4年後であることを確認した。

4・東京都写真美術館より、自主企画展「黒部と槍ヶ岳冠松次郎と穂苺三寿雄」の後援、協力依頼があり、承認した。(高原)

5・1月26～27日に支部事務局担当者会議を開催し、30支部が参加(高原)

支部の平成25年度事業計画発表のほか、会計処理(寄付金)、日本三百名山ガイドブック発刊の説明などを行なった。また神崎日山協会長の講演があった。

6・当会への寄付金は個人都民税の税額控除対象であるため、そのような事務処理をするよう、東京都主税局より要請があった。(高

原)

7・山研を利用して、トップクライマー33名によるウインタークライマーズ・ミーティングが2月9日～11日の3日間開催された。(古野)

8・内閣府より「立入検査の考え方」を記した書類が届いた。(高原)

9・会報「山」2月号について(柏) 海外登山基金を受けた3チームの登山報告、ジオサイエンスの記事などを掲載。

【今後の予定】

1・2月18日(月)に「国際山岳年プラス10」の報告書および会計報告

の進捗状況について説明がある。

(高原)

2・3月17日(日)、第33回高所順応研究会(都岳連)が行なわれる。

(高原)

3・「植村直己冒険賞」受賞者の発表を2月25日に行なう(2月12日の予定だった)。(高原)

4・深田久弥山の文化館「日本百名山」写真コンテスト審査結果と写真展が、3月23日～4月7日、加賀市美術館で開催される。

ルーム目誌 2月

- 1日 高尾の森づくりの会
- 4日 山の自然学研究会 総務委員会
- 5日 図書委員会 スケッチクラブ
- 6日 休三会 集委員会 公益法人運営委員会 海外登山基金
- 7日 常務理事会 YOUTH CLUB
- 8日 九五会
- 12日 山岳研究所運営委員会 スキークラブ スケッチクラブ
- 13日 理事会 山想倶楽部
- 14日 フォトビデオクラブ 山の自然学研究会 山岳地理

クラブ

15日 緑爽会 支部活性化PTT

16日 「山の日」制定PTT

18日 燦々会

19日 総務委員会 資料映像委員会

20日 00回 スキークラブ

21日 三水会 青年部 つくも会

25日 科学委員会 みちのり山の会

26日 総務委員会 高尾の森づくりの会 フォトビデオクラブ

27日 YOUTH CLUB

28日 デジタルメディア委員会

29日 集委員会 図書管理委員会

30日 緑爽会

31日 麗山会 自然保護委員会

01会

学生会 山遊会 海外委員会

2月来室者 443名

物故

史 占春(名誉会員) 13・1・27

竹内 堯(3972) 13・2・5

金子誠吾(4199) 13・2・24

吉武正子(4806) 12・12・19

前嶋 信(5660) 13・1・30

細田盛弘(6952) 13・1・23

高橋 博(7425) 13・1・31

退会

吉川信市(3819) 秋田

小西 毅(7063) 山陰

畑 貢(7178)

嶋田五郎(10499) 越後

鈴木康平(11548) 静岡

田久和義隆(11911)

若松林治(12187)

野路哲治(12627) 福井

横田重雄(12962)

石井孝行(13360)

横沢盛悦(14368) 岩手

佐野美恵子(14381) 東海

山本紘典(14682) 山梨

倉俣武男(15187) 千葉

日本百名山の石、寄贈のお願い

奇石博物館

「奇石博物館」は、岩石、鉱物、化石を収集展示している博物館です。当館については、会報「山」768(2009年5月)号、「山の博物館訪問」にて紹介をしていただきました。そのなかで、日本百名山の山頂の石を集めている旨のお知らせをしたところ、会員の皆さまから絶大なるご協力を賜りました。お陰さまで、現在まで90山の石を集めることができました。現在はこうした石を採集することは禁止されていますので、昔、記念にと持ち帰られた石で、もう手放してもよいというものがございましたら、ぜひご寄贈いただけないでしょうか。

日本百名山山頂の石がそろいましたら、百名山の紹介、日本の山岳地形の成り立ち、日本の美しい山と山を大切にする日本の文化を織り交せて、石を展示する予定です。

現在、未収集の石は以下の10山のものです。大きさ形状は問いません。どうぞ引き続き皆さまのご協力をお願い申し上げます。

- ・北海道／大雪山、後方羊蹄山、トムラウシ山
- ・東北地方／巻機山、魚沼駒ヶ岳、飯豊山、八幡平、八甲田山
- ・中部地方／悪沢岳、赤石岳

[連絡先] 奇石博物館 担当：荻原美広
 ☒ kiseki-ogi@vcs.wbs.ne.jp
 〒418-0111 静岡県富士宮市山宮 3670
 TEL 0544-58-3830



インフォメーション

◆自然保護全国集会予告

自然保護委員会

2013年度自然保護全国集会は、富山支部共催で開催します。追って会報『山』4月号にて、詳細をお知らせします。

日時 7月6日(土)～7日(日)

場所 立山国際ホテル

演題 「立山・弥陀ヶ原の自然に学ぶ」(仮題)

◆「高尾の森」第13回植樹祭のご案内
高尾の森づくりの会

ハイキングの服装、弁当、作業用手袋、マイカップ持参のこと。

小雨決行、荒天時は中止。

日時 4月14日(日)

集合 9時10分に小下沢ベース

費用 一般500円、大学生200円(法人会員、高校生以下は無料)

定員 200人(法人は1グループ10人以内)定員で締切

申込 3月20日までに、龍久仁人 JACtakao@JACtakao.net 048(254)2852 332-0031 川口市青木1-21-7(402)

申込 3月20日までに、龍久仁人 JACtakao@JACtakao.net 048(254)2852 332-0031 川口市青木1-21-7(402)

◆高尾の森づくりの会 プロジェクト参加者募集

*詳細は <http://jactakao.net/> を参照。

◆高尾の森づくりの会 プロジェクト参加者募集

各プロジェクトにより、申込先が異なります。詳細は、高尾の森づくりの会のHPを参照ください。

<http://jactakao.net/>

◆第3回ラオス植林・植樹ツアー

日程 6月15(土)～20日(木)

費用 往復航空券は各自手配

・ラオス国内での費用約1万円(ホテル・食事・バス代を含む)

募集 20名(定員で締切)

申込期限 4月15日

■第10回三宅島緑化再生

日程 5月24日(金)～26日(日)

(23日22時 東海汽船乗船)

費用 2万7000円(往復船賃、宿泊代、島内バス代を含む)

申込期限 4月15日

■第5回東日本森林復興 気仙沼大島

日程 6月14日(金)～17日(日)

(期間中の出入り自由)

費用 交通は各自手配

・宿泊費3泊(6000円)、キャンプ村(4000円/人数+400円)フェリー往復、食事は別途必要

申込期限 5月31日

■第7回粟島竹林整備

日程 6月29日(土)～7月1日(日)

(28日夜、車で東京発。7月1日朝帰京)

費用 1万8810円(宿泊・フェリー代を含む)

申込期限 6月25日

■訂正とお詫び

2月(813)号8頁、1段13行「慶応義塾大山岳部」は「慶応義塾山岳部」、19行「小島鳥水、鳥水の文筆仲間」は「小島鳥水の文筆仲間」の誤りでした。

どちらにも編集者のリライتمスによるものです。ともに訂正してお詫びいたします。

◆編集後記

●先月号に続き、海外登山助成基金のレポートを2本掲載。最初にパタゴニアのレポートを書いてくれた横山勝丘(通称、ジャンボ)さんは、このたびピオレドール・ジュリー(審査員)に選ばれ、4月には審査のためにシャモニに向かう。同賞のジュリーに日本人が選ばれたのは、当会の萩原浩司理事など3人目。また、先月号にレポートをもらったキャシャールのクライミングについては、ピオレドールにノミネートされた。日本人はこの数年ノミネートの常連となっているが、何度続いても嬉しいニュースだ。

●山にも春の訪れ。冬芽が膨らみ、根回り穴が大きくなり、日も長くなった。陽春の躍動ある季節です。(柏澄子)

日本山岳会会報 山 814号

2013年(平成25年)3月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 尾上 昇
編集人 柏 澄子
Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社